

中川シズ 離れていましたからなんでもなかった
中川政雄 冬だったし、ちょうど雪が屋根にあつたしね。

中川シズ その時奥に寝ていたお婆さんが「何かバシバシいうぞ」と言うので知らせてくれて、外へ出た時にはもうすっかり…。

山崎 そして、その盲の…。

中川シズ お婆さんを負ぶり出したんです。

山崎 助かったの！

中川政雄 いやいや負ぶり出したんじゃないですここで夕飯食って婆連れて来て夕飯食べて長話、あれ酒飲みが2人3人来とったろう。香川の爺さんも秋田の爺さんも。それで、ここで長話した。あの石森というのはあしゃべりで、もうすぐしゃべってしゃべって、もう。そして、「バチバチいうぞ」と家の婆さんに言われて、「行ってみるか」と言って、行ってそこへまわったらもおボーと馬屋燃えていた。

中川シズ お婆さんはあそこにおいていなかったかね。

山崎 「バチバチいうぞ」と言ったお婆さんは？

中川シズ 「中川てり」という人。父親の母ですから、北松の親です。

山崎 火事の時、その盲の方は、その火事の時にどこに居たんですか。

中川政雄 ちょうど夕飯はここに来て食べた。寝泊まりだけむこうに。

山崎 助け出したというのじゃなくて…。

中川政雄 助け出したんではないんです。とにかくその時はもう馬屋は全然もう寄りつけなかったんです。

山崎 気がついた時はもう。

中川政雄 半分位燃えていました。

山崎 馬は？

中川シズ 馬出すことも何もできなかった。

山崎 何頭いたうちですか。何頭いたうち1頭焼けたんですか？

中川政雄 3頭か4頭いて、種馬が1頭いたんです。その種馬はどうやら馬線を破ったんだね。

山崎 馬をきらしたの。

中川シズ はい。

山崎 種馬が欲しいので、さっきの旅来へですね、ちょいちょい馬を買いに行っているんですよ。だからこの中に出てくるのですね。36、37年の連中と北松さんは、おそらくあちこちで出会っているはずです。

山崎 池田の齊藤徳次郎なんてのいましたよ。高島の方にね。

中川政雄 なにしろ私が32年（明治）生れだから36年か37年ぐらいになるんじゃないかな。

山崎 浦幌に来ているという記事がね、どっかの記事で見たことあるんですね。

中川シズ そうだね。私もおりて学校へ行ったもね。兄さんも行ったでしょう。私も冰屋さんのお婆さんに舟に乗せてもらって学校へ行ったわね。

(次号につづく)

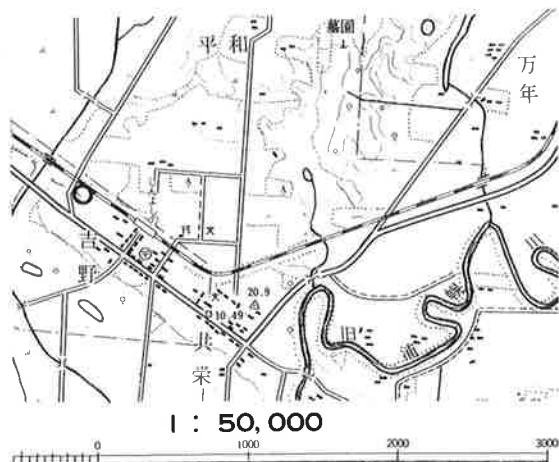
下頃辺式土器とその周辺の諸問題

後 藤 秀 彦

下頃辺式土器は、北海道東北部においてその位置を縄文時代早期の前半に占めている筒形平底を呈した土器である。本型式は1959（昭和34）年8月中旬に東京大学文化人類学教室の泉靖一助教授を主班とする「アイヌ学術調査団」の一一行により発見された。^① 北海道十勝郡浦幌町字吉野1番地所在の「下頃辺遺跡」から発見され、遺跡名をとつて「下頃辺式」との名称を与えられたものである。前述した経緯をもつ本型式が発見・公表以来10

余年を経過した今日、その概念、つまりその内容性といったものを一貫して保持していない、惑いは保持しえなかつたという事実を最近とみに感じ、本論の中でそのことを少しでも具体化できうればと考えまた、先学のご批判とご助言を賜わりたく思いペ恩をとつた次第である。

この小論を書くにあたり終始ご指導を賜わった札幌啓成高校教諭堀野昭氏並びに帶広柏葉高校教諭石橋次雄氏にお礼申し上げるとともに、常日頃



Map 1 Map of Yoshino Region showing the Location of Shitakorobe site (Mark : ○) から教えをいたいている釧路市立郷土博物館の沢四郎先生に感謝申し上げる次第である。

I、下頃辺式土器発見の頃

日本が第二次世界大戦という未曾有の戦いの中で敗北を余儀なくされ、それが現実となって現れた1945（昭和20）年。この戦争の混乱から一気に「繁栄」の道を歩み出した1950年は、朝鮮戦争の年であった。この特需によって日本全土は再び動き出し、1950年代も後半に突入すると国土の再開発という名の下で、遺跡の破壊は次第に顕著となり、1960年以降の池田内閣のいわゆる「所得倍増政策」へと引きつがれていく。こうした一般状況の中で個別「考古学」もそれと無縁ではいられなかつた。即ち、宅地造成・道路工事・開田工事等々の名の遺跡の現状変更に対し研究者は追いまわされるはめと序々になっていき、そうした傾向は現今も間断なく継続している。

こうした社会情勢の中で、1956（昭和31）年藤本英夫氏は静内町田原遺跡⁽²⁾の発掘調査を手がけた結果を得ることとなつた。この遺跡では一般に従来平底土器に先行すると考えられていた尖底土器（住吉町式土器）の下層に絡条体圧痕文・組紐圧痕文等約10種の文様構成をもつ平底土器（田原B式土器）とヘラ描沈線文・条痕文をもつ平底土器（田原A式土器）が発見された。更に、河野広道氏の調査された静内町マウタサップ遺跡⁽³⁾においても同様の結果が得られたらしい。また、1958（昭和33）年には、夕張郡長沼町幌内タンネ

トウ遺跡の調査が札幌西高校郷土研究部の生徒達によって実施され、田原遺跡で「田原B式」と分類された土器群（タンネトウE式土器）を発見するに至つた。このような結果にもとづいて、吉崎昌一・芹沢長介の両氏は北海道内最古の土器は、「田原B式」・「タンネトウE式」であるといわさせしめるに至つたが、こうした考え方はずかの間に修正をせまられることとなつた。即ち『下頃辺式土器』の登場によってである。

II、下頃辺式土器の発見

1959（昭和34）年8月13日午後、東京大学文化人類学教室のアイヌ学術調査団と途中から参加した、当時北海道大学地質学教室の研究生であった吉崎昌一は、国鉄根室本線新吉野駅から豊頃駅方向約1km付近の工事現場で崖面に露呈していた竪穴住居跡を発見した。これが下頃辺式土器を発見するに至つた下頃辺遺跡の発見である。このニュースを毎日新聞が詳細に報道している。⁽⁶⁾ 発見の端緒として速報性をもつものであるので、いさか長文になるが全文記載したい。

【釧路で藤野記者】 アイヌと遺跡の観察を続けている東大アイヌ学術調査団（団長泉靖一東大助教授）と、途中から参加した北大地質学教室研究生、吉崎昌一氏は十三日午後、中川郡新吉野村シモコロベ^(註1)の国鉄工事現場のガケ面に露出していたタテ穴住居跡から、北海道最古とみられる完全な平底土器を発掘した。その上層には、これまで最古とみられていた田原B式土器の破片も出ており、このようにはっきりした上下関係をもって発掘されたことも、北海道でははじめてのこと、世界最古の夏島式土器に匹敵する古さをもつとも推定されており、日本の先史時代を探る貴重な手がかりとなつた。

発見場所は、国鉄の構内線新設用地を広げるため、ブルトーザーで削られた上部の断面で、くつきりとタテ穴住居跡の断面を示しており、床面は地表から1m^(註2)、土器はなかったが、黒曜石の石片、大量の木炭が発見された。

問題の平底土器は床面から約20cm^(註2)上部にあり、枝の先でひっかいたようなヒラガキ沈線の模様をもち、底は平らで口淵部など、ほぼ1個分がそろつており、この層からは黒曜石の石片と石錐も発掘された。

これまで北海道で最も古い土器は昨年道南静内で発掘された田原B式、札幌付近のタンネトウE式といわれ、無土器文化に続く7・8,000年前とされていたが、こんどの調査では、その田原B式の破片が平底土器の包含層よりもさらに古層から出土した。つまり、平底土器の方が田原B式よりも古く、少なくとも^{註3}8,000年以前の土器文化であったことが確認された。

新発見の土器文化は、先に札幌学芸大学河野広道教授が命名したマウタサップ式土器や小樽博物館の竹田学芸員が発表したアルトリ式土器などと類似しているが、関連は不明。雑粘土を使い、植物纖維を使っていない点や、文様土器のぐあいなどからといって、現在世界最古といわれている約9,000年前の夏島式土器（横須賀市付近から出土）に匹敵するとも推定されている。正確なことはこんごの発掘に待たなければならないが、この現場は、工事のため破壊するおそれがある点が心配されており14日、十勝地方教育局に保存の申し入れをすることになっている。

慶大文学部江坂輝弥氏の話 早期知床土器文化として大変注目すべき発見だと思う。田原B式の下層から出ている点などからといってタンネトウE式よりもう一つ古い北海道最古の土器文化であろう。私はこれをムシリI式と呼び、青森県下北半島から八戸までおよんでいることを確認しているが、こんどの土器は型式からいってもそれより古いと思う。それが北海道東部で発見されたわけで経路その他今後の土器文化研究の大切なカギになると思う。

以上が、毎日新聞に掲載された記事の全文であるが、この後同年9月初旬に河野広道氏を加えて本格調査に臨むわけである。その後の経過については、吉崎昌一氏が触れているので割愛するが、本型式土器の発見で、北海道における縄文早期追求の目は住吉町式から次第に田原B式・タンネトウE式に、そして無文・条痕文・沈線文を具備する平底土器へと転移し現在に至っている。

しかしながら、こうした土器群はすでに戦前において齊藤米太郎氏が浦幌新吉野台細石器遺跡から検出しており、当時何故このグループの土器群が注目されなかったのか不思議である。ともかく下頃辺遺跡の調査結果は、釧路において沢四郎氏に引き継がれる結果となり、東釧路貝塚をはじめ

沼尻遺跡・大染毛遺跡等で下頃辺式とは若干趣きを異にした土器群の発見となり、更に地元浦幌町にあっては、下頃辺遺跡に近接した平和遺跡の調査となって具体化してきている。

III、平和遺跡の再検討——土器を中心として——

1959（昭和34）年に下頃辺式が公けになって以来、報告書等において「下頃辺式」として発表されたものは管見の範囲では、平和遺跡と枝幸町川尻遺跡とがあるのみである。^⑨ そのうち川尻遺跡では第3層出土の無文土器を下頃辺式に比定しているがまとまった資料ではない。それに対して平和遺跡出土の遺物はかなりまとまった形で「下頃辺式」という名称の下で報告がなされている。従つて、ここでは、下頃辺遺跡に近接し多数の資料を供出した平和遺跡の諸資料にスポットをあて下頃辺式土器というものの、あるいはその周辺に位置すると思われる土器群について検討し下頃辺式土器そのものを具象化したいと考える。

平和遺跡は、北海道十勝郡浦幌町字平和85番地に位置する。^⑩ 1967（昭和42）年と1970（昭和45）^⑪年の2度にわたって、大場利夫氏らによって調査され、各々概報と本報告書が提出されている。

1967（昭和42）年の第1次発掘調査においては遺構の検出を探索するためのテスト・ピットの発掘と崖面に露呈している竪穴住居跡の発掘を主体として調査がなされ、報告者の大場利夫・明石博志らのいう「下頃辺式」・「浦幌式」^{註4}が出土し更に「下頃辺式」の下層からも土器が出土したという。この土器は「下頃辺下層式」と仮称され、1970（昭和45）年夏の第2次発掘調査に引き継がれることになる。第2次発掘調査においては、報告者の明石博志氏のいう「下頃辺式」と前回の調査で検出された「下頃辺下層式」の2つの種類の土器が円形プランの竪穴住居跡に伴って出土しているが、ここで言う「下頃辺式」なるものがはたしてタイプ・サイトである下頃辺遺跡から出土したものと同質であるのかは疑問の生ずるところであり、以後その点について触れたい。

第1次発掘調査については、沢四郎氏がすでに指摘している如く明石博志氏のいう「下頃辺式」とは、釧路地方において詳細に今析の進められている「沼尻式」・「東釧路I式」・「大染毛式」の集合体にすぎない。更に沢氏は、こうして集合

体となって出土するのは大樹式の例をも引きながらこれが十勝地方における特性なのかも知れないと述べているが、そうではない。キメの細かい層位的調査を住居跡という条件を踏まえて調査にあたれば必ず各土器群が出土するであろう。少なくとも平和遺跡にあっては、表土において各群の土器が混在はしていたが、火山灰下の各層は非常に良好な層位関係を示していた。それは、ともかくとしても、沢氏のこうした指摘は原則的には1970(昭和45)年の第2次発掘調査の報告にもあてはある。例えば、第5号住居跡床面出土の貝殻腹縁文をもつた平底土器は明らかに沼尻式土器であるし、第8号住居跡出土の微隆起線文をもつ平底土器は大樂毛式土器の特徴を強く具備している。他にもこうした例は枚挙にいとまがないが、はたして下頃辺式土器(報告者の明石氏は、「下頃辺下層式」に対して「下頃辺上層式」ということばを使用している)がこの平和遺跡から出土したのであろうか。断じて否である。

ここで、再び下頃辺遺跡の調査に直接担わった人々の言辞を思い起してみる必要がある。

吉崎昌一(1959)

まず最初に地面が掘りこまれ、タテ穴住居が作られる。炉の存在は明らかでない。当時使用されていたのはひっかいた線の整形こん(痕)をもつ平底の土器である。つぎに。この住居が放棄され屋根や柱はくさって、くぼんだ地面が残された。このくぼ地に、ヘラでひっかいたような整形こんをもつ平底土器と、わずかな貝ガラ紋土器片が捨てられていた。この上に、火山灰と黒土(植土)がたまり、そこから田原B式土器の破片が検出された。したがって、この遺跡の調査からは、それまで最古と思われていた田原B式土器よりも、更に古い平底の土器——後に下頃辺式土器と名付けられた——のあることがつきこめられたわけだ。^⑬

河野広道(1961)

5、浦幌町下頃部

1959年東大の泉助教授、吉崎昌一氏らと筆者が共同発掘した土器で、下頃部式(シタコロベシキ)と仮称している。深鉢、平底で、下方の細まった筒形に近い形をしている。肉は比較的薄く、繊維を混じない。口唇部は単純な平縁または波状を呈している。文様は横位の貝殻条痕文が多いが、沈線文、貝殻腹縁文、擦痕文、交叉する条痕文など

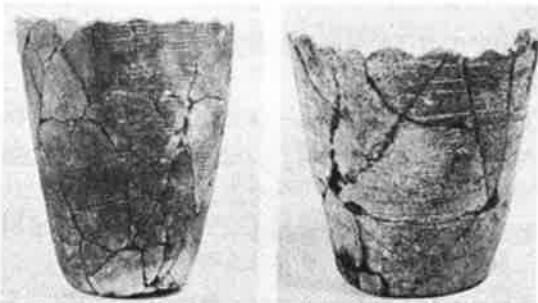
も見られる。底面にホタテ貝の貝殻背文を有するものや、同じく条痕文を有するものもある。アカツキ式に最も近似する土器である。^⑭

岡田宏明(1961)^{註5}

新吉野遺跡は、半分破壊された住居址を掘ったにすぎないので、決定的な資料とはいえませんが層位だけははっきりしています。静内で田原B式と呼ばれている絡縄体圧痕文をもつ土器が上層から発見され、下層および床面から条痕文土器が出土したのですが、この条痕文土器と一緒に、ごく少量ですけれど、貝殻腹縁文をもつ土器片が出ているので、この点が一番問題になると思います。石器は、上層下層とも、石錐がひじょうに多く、しかもそれ以外には整った形態の石器が少ないのが特徴的です。

以上の3者が、直接調査に担わった研究者諸氏の表現である。この他に山内清男氏の『日本原始美術1 縄文式土器』の中に中形・小形の下頃辺式土器の写真が2葉掲載されている。この山内氏のも含めての4者の表現・写真を比較検討してみると、前記の3者に各々ニュアンスの相違を感じさせられる。河野広道氏のそれは、貝殻文土器までも含めた幅の広い土器を指しているようであるにもかかわらず、吉崎昌一・岡田宏明両氏の表現は「ひっかいた線の整形痕」若くは「条痕文」という沈線文あるいは条痕文土器群を指しているようである。即ち、吉崎・岡田の両氏は貝殻文土器群の扱いを吉崎氏は「…では、下頃辺式土器に判なって発見された貝ガラ紋土器の破片…」と表現しているし、岡田氏は「…この条痕文土器と一緒に、ごく少量ですけれど、貝殻腹縁文をもつ土器片が出ているので…」と発言しており、「ひっかいた線の整形痕をもつ土器」・「条痕文土器」とは別の扱いをしている。

こうした3者の表現を踏まえた上で、『日本原始美術1 縄文式土器』に掲載された2葉の写真を見た時、釧路で各々分類されている沼尻・東釧路I・大樂毛・テンネル等の土器群とは口縁部・施文・底部の突出の有無・器形等で相入れないものがあるし、また、明石博志の提唱している縄文早期の土器「曉式」などとも相入れないものがある。筆者が実見した印象とこの写真を合わせて見る時下頃辺式とは、小波状口縁をもち(沼尻式のようには大きくなく東釧路I式のように細かくは



Pl. 1 Shitakorobe Type Potties From Shitakorobe Site (S .Yamanouchi : 1964)

ない）、器形は底部位において若干細まる筒形平底土器である。また、底部は突出しておらず沼尻式のようにL状を呈している。文様は横位にかなり伸びやかな沈線がからやかに走っている。

また、これに伴って出土した貝殻文土器については、前記の2者その他にもその伴出関係についての疑問を投げかけている。例えば、沢氏が上坂・アルトリの両遺跡出土の貝殻文土器との関連の中での課題がそうである。¹⁶⁾

北海道東部において、一般に周知されている縄文早期の貝殻文土器は沼尻式土器である。もし、下頃辺遺跡で伴出した貝殻文土器がこの沼尻式土器であったとしたら下頃辺式とはそう時代差のない期間に成立したものと考えられよう。また、そうであるとしたら、この少量の貝殻文土器は、下頃辺式とのセットとしてではなく、釧路市沼尻遺跡から沼尻式が単独で出土していることを考え合せても別個の型式の土器として考えるべきであろう。

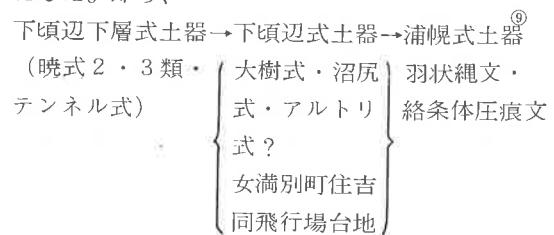
こうして見えてくると、前述したように平和遺跡にあっては真正の下頃辺式は1片も出土しなかったと見てよいであろう。そして、第2次発掘調査の成果としての「下頃辺式」は、沢氏が第1次発掘調査の報告に基づいて指摘したのと原則的には同様のことが言えるであろう。

平和遺跡においては、以上で検討して来た土器群の他にもう一つ主要な土器群がある。これは、第1次発掘調査時に、下頃辺式よりも更に下層から出土したということで「下頃辺下層式」との名称を付した土器である。本土器群は、おおよそ無文のものと縦位に沈線文をもった土器群に分類が可能であり、底面にホタテ貝背压痕文をもつもの底部に親指による指圧文のあるもの等があり、無

文のものに対して沈線文をもつものの方が文様要素のパターンにバラエティが認められる。こうした土器群は、帯広の曉式、釧路村のテンネル式等に比定されるが、特にテンネル出土のテンネル式と平和遺跡出土のものを持ち寄って見くらべたところ同一個体かと思われる程のものがあった。^{註7)}

特に石英を粉碎して土器胎土に混しているのが特徴である。

こうした土器群（下頃辺上層・同下層式）について、調査に当った明石博志は、その後の論文の中で、前回発表の各々の編年的位置付けをひるがえした。即ち、



としていたのを、下頃辺式を下頃辺上層式に置きかえ、更に本型式を2分して下頃辺上層式1類と同2類として、1類を曉式3類に比定している。¹⁷⁾

曉式3類は、当初彼自身によってテンネル式に比定されており、1970年の第2次発掘調査の報告書においてもこれに類する縦位の沈線文をもったグループを下層式の仲間に入れている。この変化はどこから来るものなのか全く理解に苦しむところである。そして、下頃辺上層式2類なるものを大樹式に比定している。大樹式自体の概念の不明確さが指摘される今日、こうした分類自体真実性をうすめるものであろう。

以上、平和遺跡における土器群の内容性を概括的ながら検討を進めて来たが、全ては、下頃辺式土器自体の内容の不明確さから来るものであるといえる。こうしたことは、調査報告書の提出されていない今日一面では当然の帰結と言えるのかもしれないが、安易に型式の内容性といったものを借用してしまうと、研究の進展に混乱をきたすばかりであり、下頃辺式という型式名が、北筒式・野幌式・余市式・前北式などあまりかわらない意味しかもたなくなるのではないかと案ずるものである。

1971（昭和46）年堀野昭氏と筆者らは、下頃辺式土器を求めて吉野遺跡の発掘調査を実施した。^{18) 19)}

遺跡は、下頃辺遺跡と同位段丘の吉野台地の南

端にあり眼下に下頃辺川が流れている。調査は、竪穴住居跡（半壊）1基を完掘したが、床面及びその上層から沼尻式と東釧路I式の中間ぐらいに位置すると思われる土器群、その上層から大楽毛式、更に上層から東釧路III式の古い型式と同II式の小破片1片、最上層からは、中茶路式と東釧路IV式の中間に位置すると思われる土器が層位的に出土した。しかし、目指した下頃辺式は1片も検出することができなかった。

IV. おわりに

以上、下頃辺式に関する諸要件を概括的にはであるが、論述して来た。下頃辺式のもつ内容的の具体化及び概念化が強く望まれる昨今であるが、良好なホライゾンをもつ遺跡の探索と適格な型式論を展開することが今後に残された大きな課題であろう。

(浦幌町郷土博物館)

註

註1 中川郡新吉野村シモコロベは毎日新聞側の誤りで、正しくは、十勝郡浦幌町字吉野である。

註2 ヒラガキ沈線文とあるのはヘラガキ沈線文の誤りであろう。

註3 ちなみに、勝井義雄・近堂祐弘両氏の黒耀石の水和層による年代測定では7,800年B.P.という数字が出ている。

註4 本土器は浦幌式ではなく、東釧路III式の範囲に包括されるものである。

註5 下頃辺遺跡の誤り。

註6 最近明石博志は「曉遺跡出土の土器群」を①細石刃（？）が伴出したこと ②樽前D降下軽石層より下層から出土したこと ③本土器群と共に伴したという黒耀石製石器の水和層測定実年代が9200B.P.と出たことなどの理由をもって縄文早創期に位置付けている。

註7 1973（昭和48）年7月、国学院大学々生河村七五三喜、立正大学々生佐藤訓敏の両君とともに実物を持って釧路市立郷土博物館に赴き沢四郎西幸隆両先生のご教示を受けた。

引用文献

- ①泉靖一「シタコロベで土器を発見した話」（『釧路博物館新聞』93）1959
- ②藤本英夫「静内田原遺跡について」（『せいゆう』

4) 1958

- ③河野広道「北海道の土器」『郷土の科学』23) 1959
- ④札幌市西高等学校郷土研究部「夕張郡長沼町幌内タンネトウ遺跡略報」（『郷土の科学』26）1959
- ⑤芹沢長介・吉崎昌一「アイヌ以前の北海道——北方古代文化のナゾを探る——」（『科学統報』11—5）1959
- ⑥毎日新聞 1959年8月16日登載記事
- ⑦吉崎昌一「北海道の夜明け前13 初期の土器文化（2）」（『読売新聞』）1959年12月9日付
- ⑧斉藤米太郎「櫛目紋尖底土器を随伴する細石器遺蹟」（『考古学雑誌』33—7）1943
- ⑨大場利夫・明石博志『浦幌町平和遺跡 第1集』1968
- ⑩加藤正「石刃に共伴して発見された土器——枝幸町川尻遺跡概報——」（『北海道考古学』4）1968
- ⑪浦幌町教育委員会『平和遺跡——浦幌町平和遺跡発掘調査報告書——』1971
- ⑫沢四郎「道東に於ける早期縄文土器の編年について」（『釧路史学』創刊号）1961
- ⑬河野広道「帶広市曉台地遺跡調査報告」（『アイヌ・モシリ』5・6合併号）1961
- ⑭座談会「北海道考古学の現状と課題」（『民族学研究』26—1）1961
- ⑮山内清男『日本原始美術1 縄文式土器』1964
- ⑯沢四郎「日本考古学の現況・北海道」（『歴史教育』8—3）1960
- ⑰明石博志「十勝地方における土器と細石刃を伴う文化」（『北海道考古学』6）1970
- ⑱後藤秀彦「浦幌町の発掘調査された遺跡」（『浦幌町郷土博物館報告』創刊号）1972
- ⑲大場利夫・後藤秀彦「浦幌町吉野遺跡」（『日本考古学年報』24）1973

表紙解説 乙部（オトンベ）チャシ跡は、浦幌町厚内の太平洋に面する位置に構築された、丘頂式のチャシコツである。斉藤米太郎氏によればかつては稻荷神社を祀り、漁の先後にはイナウをあげていたらしい。付近には、ガンコウラン・フレップなどの植物が繁茂していたらしい。

（後藤秀彦）